

ただいまからシンポジウム「〈具体〉再考 第2回 1930年代の前衛」を始めたいと思います。本日はお忙しい中、ご来場くださってありがとうございます。私は、企画を担当しました大阪大学総合学術博物館の加藤瑞穂と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず開催趣旨を簡単に申します。このたびのシンポジウムは、関西に生まれた戦後日本を代表する前衛美術グループ「具体美術協会」（略称：具体、1954-1972年）について再考するシリーズの2回目にあたります。昨年の1回目は「1950年代の前衛グループ」と題して、「デモクラート美術家協会」、「実験工房」等と「具体」を比較し、それらの共通性ならびに固有性について検討しました。2回目となる今回は、1回目の論点を踏まえて、「デモクラート美術家協会」、「実験工房」、「具体」それぞれの中心的役割を果たした瑛九（1911-1960年）、瀧口修造（1903-1979年）、吉原治良（1905-1972年）の接点に注目し、研究者による発表・討議を通して、戦前の1930年代まで遡る彼らの活動やその志向、戦後との連続性などについて考えたいと思います。

最初に、光田由里さんに「瀧口修造の〔物体〕 接触 写真 幾何学」と題してご発表いただきます。美術評論家の光田さんは現在、DIC川村記念美術館に学芸課長として勤務されています。ご専門は近現代美術および写真で、展覧会企画と共に評論も数多く執筆されています。これまでの主要著書に『写真、「芸術」との界面に：写真史 1910年代-70年代』（青弓社、2006年、日本写真協会学芸賞）、『高松次郎 言葉ともの—日本の現代美術1961-72』（水声社、2011年）、主要カタログに『安井仲治写真集』（共同通信社、2004年、倫雅賞）、『野島康三 作品と資料集』（渋谷区立松濤美術館、2009年）、『WOLS 路上から宇宙へ』（左右社、2017年）等があります。

続いて大谷省吾さんより「瑛九は現実をいかに捉えようとしたか」と題してご発表いただきます。大谷さんは、1994年に東京国立近代美術館研究員になられ、2016年から美術課長として勤務されています。ご専門は日本近代美術で、同館で精力的にその時代の作家を取り上げられ、その主要なものとして「生誕100年記念 吉原治良展」（2006年）、「生誕100年 鬘光展」（2007年）、「生誕100年 岡本太郎展」（2011年）、「瑛九1935-1937間の中で「リアル」をさがす」（2016年）等、があります。また昨年到现在までのご研究をまとめた著書『激動期のアヴァンギャルド シュルレアリスムと日本の絵画 1928-1953』（国書刊行会）を刊行されました。

それではさっそくですが、光田さんに、続いて大谷さんにご発表をお願いいたします。